

「働きかけを表す他動詞＋非目的語NP」から成る使役移動構文

田辺 英一郎

The Caused-Motion Construction That Consists of “an ACT-ON Verb and a Non-Object NP”

Eiichiro Tanabe

(Received on Jan. 25, 2013)

Abstract

According to Levin and Rappaport Hovav(1991), English verbs such as *wipe*, *sweep*, *brush*, *rake* and others are called *wipe*-class verbs. In the prototypical use, these verbs appear in the syntactic form of NP V NP and denote an activity on a place. On the other hand, in an extended use, they appear in the syntax of NP V NP FROM NP and take on an additional removal sense. This paper points out that verbs such as *bang*, *shake*, *tap*, *kick* and others also show the same syntax and semantics as *wipe*-class verbs, although they do not belong to this class. In our discussion below, we call both such verbs and *wipe*-class verbs as ACT-ON verbs. The purpose of this paper is to account for how the cause-motion construction comprised of “an ACT-ON verb and a non-object NP” is licensed.

キーワード: 使役移動構文, 構文文法, フレーム, スキーマ, 事例化

1 はじめに

Levin and Rappaport Hovav (1991)¹⁾ は、基本的意味のレベルでは表面接触を表す動詞が、除去を表す動詞に意味拡張することを指摘している。

- (1) a. John wiped the table.
- b. John swept the floor.
- c. John brushed his jacket.
- d. John raked the sidewalk.
- (2) a. John wiped the stain from the table.
- b. John swept the crumbs from the floor.
- c. John brushed the dust from his jacket.
- d. John raked the leaves from the sidewalk.

(1)が基本用法, (2)が拡張用法である。LRH(1991)およびLevin(1993)²⁾ は、*sweep*, *wipe*, *brush*, *rake*といった動詞を*wipe*クラスの動詞と呼び、これらを除去動詞の一つの下位クラスに位置づけている。¹ Levin(1993)

は、*wipe*クラスの動詞の大半が「表面接触→表面接触＋除去」というふうの意味拡張することを指摘している。これらの動詞がこのように意味拡張するのは、これらが「(不要物の)除去」という目的をそれぞれの背景の意味に含意するためであると考えられている(中村(2002)³⁾, 都築(2004)⁴⁾, Nemoto(2005)⁵⁾など)。

本研究は、Levinが言うところの*wipe*クラスの動詞には分類されないが、これらと同じ振る舞いを示す動詞があることにも着目する。

- (3) a. I was banging the old catcher's mitt.
- b. He shook his shoes.
- c. Apgood was tapping his cigar.
- d. Holly kicked his shoes.
- (4) a. I was banging the dust out of the old catcher's mitt. (COCA)⁶⁾
- b. He shook sand out of his shoes.
- c. Apgood walked over to the washbasin, tapping the ash from his cigar. (BNC)⁷⁾
- d. Holly kicked the snow from his shoes against the

jamb of the door. (BNC)

(3)が基本用法, (4)が拡張用法である. wipeクラスの動詞とここに挙げたbang, shake, tap, kickなどとの共通点として, 次の三つが挙げられる.

- ① NP V NPを基本用法とし, 何らかの対象への働きかけを表す他動詞である.
- ② 拡張用法では, 動詞の本来の目的語ではないNPが目的語位置にある.
- ③ 拡張用法は, 使役移動を表す.

本研究は, wipeクラスの動詞およびbang, shake, tap, kickなどの動詞を「働きかけを表す動詞」と呼ぶ. これらの動詞は, 語彙概念構造を用いると[x ACT ON y]で表される活動動詞に相当する(影山(1996)⁸⁾). 本研究は, こうした「働きかけを表す動詞+非目的語NP」から成る使役移動構文が, どのように成立するのか(認可されるのか)を明らかにしたい.

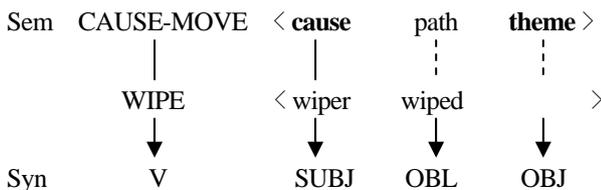
2 構文文法を利用した説明

最初に, Goldberg(1995)⁹⁾の構文文法をいま上で述べた問題の解決に当てはめてみたい. Goldbergは, 「構文」という言語単位の存在を提案している. Goldbergは, 何らかの意味と形式が結びついている言語単位は全て構文と見なしている. 厳密には個々の単語, さらには単語を構成する形態素も構文の一種である. Goldbergは, 文単位の構文については, 二重目的語構文, 使役移動構文, 結果構文, way構文などを議論対象としているが, 本研究が問題とする例は, このうちの使役移動構文に相当するだろう.

Goldbergに従うと, 例えば上で述べた例(2a)は, 次のように分析されるだろう.

(2) a. John wiped the stain from the table.

(5) 構文文法を利用した分析



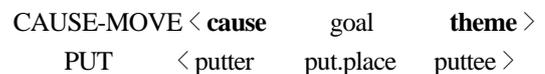
Goldbergは, 構文が項を持つことを提案しており, これらを項役割(argument role)により区別している. cause, path, themeは, 使役移動構文が持つ項役割を表してい

る.² Goldbergは, 動詞の項を参与者役割(participant role)により区別している. wiper, wipedは, 動詞wipeが持つ参与者役割を表している. Goldbergは, 使役移動構文ではなく結果構文の説明の中でではあるが, wipeはwiperおよびwipedという参与者役割を持つと述べており(同書p.189), (5)はこれをそのまま踏襲している. (5)は, cause, path, themeといった構文の項が, 統語構造ではそれぞれ主語, 前置詞の目的語, 目的語として具現されることを表している. Goldbergは, 動詞の項が構文の項に融合(fuse)されることにより, 動詞が構文に組み込まれると考えている. 上の表示で言えば, wiper, wipedが構文の項cause, pathに融合されている. これにより, wiper, wipedは, 統語構造ではそれぞれ主語, 前置詞の目的語に具現される. ここで注目したいのは, 上の表示においてはthemeという構文の項に融合される動詞の項がないことである. 同研究は, このような場合, こうした構文の項に連結する文法関係は, 動詞ではなく構文によって与えられると考えている. よって, 上の例におけるthe stainは, 動詞wipeではなく, この動詞が組み込まれた使役移動構文によって与えられる語句である.

このように, 構文文法を利用すると, John wiped the stain from the table.が使役移動を表すことと, 動詞wipeの本来の目的語ではないNPが目的語位置に生起していることが説明できる. 同様のことが, wipe以外の働きかけの動詞についても言えるだろう. (5)におけるWIPE, wiper, wipedが別の語になること以外は, 動詞wipeと同じだからである.

次に, 以上のような分析を検討したい. Goldbergは, 構文の項(項役割)と動詞の項(参与者役割)が融合には, ①意味的一貫性の原則(The Semantic Coherence Principle)および②対応関係の原則(The Correspondence Principle)が関わっていると述べている(同書p.50). 後者については, 本研究の議論に直接は関わっていないと思われるので, 触れないものとする. しかし, 前者の観点から見ると, 上の分析は問題があることを述べたい. 意味的一貫性の原則とは, 動詞項の参与者役割が, これと融合される構文項の項役割を意味的に具体化していなければならないといった主旨のものである. 次の例は, 同研究からの引用であるが, これらについてはこの原則を満たしているだろう.

(6) 使役移動構文 + put



(7) 二重目的語構文 + kick

CAUSE-RECEIVE < agent recipient patient >
 KICK < kicker kicked >
 eg. Bob kicked the ball Pat.

幾分直観的な判断になるかもしれないが、それぞれの参与者役割は、すぐ上に示される項役割を意味的に具体化していると言えよう。

再び(5)を見てみよう。動詞wipeの意味のみから判断すると、wiperはagentを具体化しているとは言えるが、causeを具体化しているとは考えにくい。wipeは基本的には持続的な行為のみを表す動詞であるためである。また、pathとwipedの融合にも問題があるだろう。wipedはWIPEという行為の対象を表しているの、pathを具体化しているとは言い難い。ここで、pathを例えばlocationとすれば、wipedを具体化していると言えるかもしれない。しかし、theme(移動物)とpath(経路)が示されて初めて、これらを含む事態が移動を表すことが分かるのではないだろうか。よって、pathが含まれない < cause location theme > では、移動事態の役割表示としては不十分だろう。

Goldbergの構文文法に従うと、本研究が取り上げる使役移動構文は構文の項に動詞の項が融合されることによって成立する、と一応は説明できるだろう。しかしこれに従うと、いま述べたように、不自然な融合を認めなくてはならなくなるようだ。また、同理論に従うと、移動物を表すNPは動詞ではなく、構文によって与えられることになる。しかし、次節にて述べることに関わるが、この語句は決して動詞の意味と独立しているわけではない。この点を捉えられないという点では、同理論は不十分だろう。このような問題は、結局、(働きかけの)動詞の意味を < v-er v-ed > という単純な形で表していることに起因すると思われる。この表示は、動詞のいわゆる語彙的意味を表している。しかし、本研究が取り上げる使役移動構文がどのように成立するかを明らかにするためには、動詞の語彙的意味だけでなく「背景の意味」にも着目する必要があるだろう。この点を踏まえつつ、次節の議論に移るとしたい。

3 フレーム意味論を利用した説明

本節では、フレーム意味論的観点から当該の現象を説明する先行研究を二つほど概観し、これらを検討する。具体的にはNemoto(2005)とBoas(2003)¹⁰⁾を取り上げる。フレームとは、一般的に言うと、それぞれの語の背後にある、習慣、経験、信念、知覚、さらには

記憶などに関する知識構造を指す(Fillmore(1982)¹¹⁾など)。³⁾いま述べた二つの先行研究は、働きかけの動詞、特にwipeクラスの動詞とこれが生起する使役移動構文との関係を、それぞれの動詞のフレームに着目して説明している。ここで言う動詞のフレームとは、「動詞の項の実現に関わる意味(語彙的意味) + 動詞の意味の背後にある意味」を指す。

まず、Nemoto(2005)を概観、検討する。Nemotoは動詞brushの意味や文法をフレーム意味論的観点から論じている。brushは、本研究が問題とするwipeクラスの動詞の一つである。Nemotoは、一つの動詞に複数のフレームが結びついていると考えている。Nemotoは、動詞brushにはsweeping frameとsmearing frameの二つのフレームが関わっていることを指摘している。前者は接触による除去を表し、後者は接触による塗布を表す。

- (8) a. John brushed the crumbs off the table.
 (sweeping frame)
 b. John brushed melted butter over the loaves.
 (smearing frame)

どちらのフレームも「使役移動」を表している点は共通している。一方、本研究の問題に関わるのは、sweeping frameの方だと考えられるので、smearing frameについてはこれ以上立ち入らないものとする。Nemotoはbrushのsweeping frameを次のように記述している。以下、英語の原文をそのまま示す。

- (9) The Sweeping Frame
 Roles: sweeper, substance, surface, destination
 Relations: A sweeper makes contact with a
 surface with the intention of moving a
substance from the surface to a destination,
which may or may not be succeeding.
 (下線部は本研究による)

Goldberg(1995)では、動詞wipeの項はwiperとwipedの二つだけであるが、Nemotoは、wiperに相当するsweeperに加えて、substance(不要なもの)、surface(接触面)およびdestination(移動先)もフレーム役割に含めている。

Relationsは、こうした役割間の関係を記述している。下線がない部分は、brushのいわゆる語彙的意味に相当し、これが施されている部分は、この動詞の背景的な意味に相当する。この記述は、brushの字義通りの意味の背後には、行為者の何かを除去しようとする意図が隠れていることを表している点が興味深い。

以上のようなフレーム記述を利用して、Nemotoは動

詞brushの使役移動構文の成立を次のような形で説明している。

(10) a. caused-motion construction

< cause theme path/location >

b. sweeping-brush

< sweeper substance surface >

Nemotoは、詳細なフレーム記述を使う点でGoldbergとは大きく異なる。しかしNemotoは、構文の役割と動詞の役割の融合により文が成立すると考えている点はGoldbergを踏襲している。上の表示について言えば、動詞の項sweeper, substance, surfaceは、それぞれ使役移動構文の項cause, theme, path/locationに融合される。Nemotoは、項の融合についてはこれ以上のことは述べていないが、本研究は次のように補足したい。

Goldbergに従うと、動詞の項と構文の項の融合が意味的一貫性の原則を満たすかどうかは、それぞれの動詞の項、構文の項のみから判断することになるだろう。このため、前節で指摘したように、wiperとcauseの融合やwipedとpathの融合といった無理な操作を認めなくてははいけない。一方、Nemotoに従うと、動詞の項がこれが融合される構文の項を意味的に具体化していることを明確に捉えられるので、こうした無理を完全に回避できる。Nemotoはフレーム役割間の関係を詳細に記述している。(9)の“A sweeper... with the intention of moving...”からsweeperが移動使役主であることを明確に読みとることができる。また“...moving a substance from..”からはsubstanceが移動するものであることを明確に読みとることができる。さらに“A sweeper makes contact with a surface...”および“...from the surface to...”を見れば、surfaceが行為の対象となる場所であり移動の経路(起点)でもあることがはっきり分かるだろう。

Nemoto(2005)は、Goldbergを利用した分析の欠点を補う形で、brushなどの動詞を用いた移動使役構文が成立するしくみを説明していると言える。しかし、この説明が通用するのは、sweeping frameと結びつく動詞に限られるだろう。sweep, wipe, rakeなどは、brushと同じく「物の表面に、こするような接触行為を行う」という意味合いを持つので、sweeping frameと結びつくだろう。これら以外にも、例えばrub, scrub, lick, polish, shaveなども、同じ理由によりsweeping frameと結びつくだろう。しかし、次のような動詞についてはどうだろうか。

- (11) a. John squeezed the oranges.
b. John soaked the shirt.
c. John washed his eyes.

- (12) a. John squeezed some juice out of the oranges.
b. John soaked the stains out of the shirt.
c. John washed soap out of his eyes.

squeeze, soak, washなどもLevin(1993)ではwipeクラスの動詞に分類されている。squeeze, soakは、物の表面への働きかけと言うより、物全体への働きかけを表しているだろう。washについては、ここでは表面への働きかけのように解釈できるが、「こするような」働きかけではないだろう。よって、これらについては、sweeping frameと結びつけるのはかなり無理があると言える。

本研究が問題にしているのは、wipeクラスの動詞だけではない。第1節で取り上げた例をもう一度見てみよう。

- (4) a. I was banging the dust out of the old catcher's mitt. (COCA)
b. He shook sand out of his shoes.
c. A good walked over to the washbasin, tapping the ash from his cigar. (BNC)
d. Holly kicked the snow from his shoes.

これらの例もwipeクラスの使役移動構文を同じく、働きかけにより何かを除去することを表している。しかし、bang, shake, tap, kickなども、squeeze, soak, washなどと同じく、表面をこするような接触行為は表していない。よって、これらについても、sweeping frameと結びつけることはできず、Nemotoの説明法が適用できないと言える。すぐ後で述べることに関係するが、このような問題は、フレームが“Relations: A sweeper makes contact with a surface...”のような具体的な文章によってのみ記述されていることに起因すると本研究は考えている。

次にBoas(2003)を概観、検討する。Boasはwipe sweep, rub, wash, polishなどを不要物除去の動詞(removal of unwanted substance verbs)と呼んでいるが、これらは本研究が言うところのwipeクラスの動詞に相当する。Boasは、こうした動詞に対し、全部で五つの事象フレームを提案している。funnel-sense, removal-sense-1, removal-sense-2, creation-senseおよびabsorption-senseの五つである。これらのうち、本研究が問題にしている移動使役構文に関わるのは、removal-sense-2である。Boasはこのフレームを、イメージスキーマ表示を併用しておよそ次のように表している。

(13) removal-sense-2 のスキーマ



(14) removal-sense-2の参与者

Agent: entity exerting force

Patient: object or substance that may be removed
from a surface by employing force to it.Property 3: location that an object or subject may end
up in as a result of being removed from
a surface.

Property 3は少々分かりづらいかもしれないが、このフレームについて言うなら、要するに移動物が元々あった場所を表している(と本研究は解釈している)。Boasは、当該の文がこのようなフレーム記述に一致している場合、この文が認可(license)されると主張している。

Boasは、フレームを表すのに抽象的なスキーマ表示を取り入れている点で、Nemoto(2005)と大きく異なるだろう。実線の矢印は、動作主の行為対象への力の伝達を表し、黒丸は、この力を受けて移動する物(行為対象)を表している。破線の矢印は、これの移動を表し、横に長い長方形は、これが位置する表面を表している。このようなスキーマは、brush, wipeなどの表面をこするような働きかけを表す動詞のフレームのみを表すことにとどまらないだろう。実線の矢印は、表面にある物への働きかけであれば、どのような働きかけにも解釈できる。よって、Nemotoのsweeping frameには当てはめにくいwash, rinse, flush, trimなどのwipeクラスの動詞にも、このスキーマを当てはめることができるだろう。ただし、(14)のフレーム記述は、Patient: ... from a surface by...およびProperty 3: location ... from a surface. といった部分から判断する限り、何かの表面への働きかけを表すことに限定されているようだ。このため、同じwipeクラスの動詞であっても、数は多くないかもしれないがsuck, wringや先に挙げたsqueezeなどの表面というより容器(container)からの移動を表す動詞には、このフレーム記述では不十分だと言える。

ここで本研究は、いま上で示した下線部をplaceと修正することを提案したい。この場合のplace(場所)は、surface(表面)とcontainer(容器)を包括する概念を指す。これは、例えば、source(起点)とgoal(終点)をpath(経路)にまとめるのと同じである。placeは容器であることもありうるので、これを表すスキーマが横に長い長方形のままなのは問題だと思われるかもしれない。しかし、この部分は、移動するものが位置している何らかの場所であると解釈できればよいので、このままでも問題ないだろう。以上のように考えることで、上のフレー

ム記述は、表面接触以外の働きかけを表すwipeクラスの動詞の使役移動構文も認可できると言える。

(13)のスキーマ表示は、何らかの物理的な力であれば、およそどのような働きかけにも当てはまるだろう。またPatient: ... from a place by...およびProperty 3: location ... from a place. という形に(14)を修正すれば、移動の起点は何らかの場所でありさえすればよいことになる。こうした点から判断すると、この修正案は、bang, shake, tap, kickなどを用いた移動使役構文も認可するようにも思われる。しかし、Boasはあくまで、wipeクラスの動詞に相当する不要物除去の動詞のフレームとして(13)や(14)を考案していることに注意すべきである。ここで、それぞれの意味を拡大解釈することにより、bang, shake, tap, kickなども不要物除去の動詞と見なせばよいように思われるかもしれない。この場合、これらの動詞はそれぞれのフレームに不要物の除去の意味も含むことになる。しかし、次節で述べることに関わるが、働きかけを表す動詞を除去動詞(wipeクラス)かこれ以外の動詞に二分し、前者にのみ最初から除去のフレームを当てはめること自体に無理があると本研究は考える。これにより、本節ではこの問題にはこれ以上立ち入らないものとする。

本節最後に、Boasによるremoval-sense-2のイメージスキーマの考えられる問題点を指摘したい。上で述べたように、このスキーマは、およそどのような働きかけを表す動詞にも当てはまるという利点があるだろう。しかし、このスキーマを見る限り、働きかけは不要物が位置する場所ではなく、不要物そのものを対象としている。しかし、本研究の取り上げる働きかけの動詞は、wipeクラスであるなしに関わらず、NP V NPが基本形である。John wiped the table.については働きかけの対象はthe tableであるが、John wiped the crumbs from the table.についてはこれがthe crumbsであると見なすのはかなり不自然だろう。どちらも基本的に共通する事態を表しているからである。よって、働きかけの対象は、不要物ではなくこれが位置する場所であると考えてのが自然だろう(中村(2002))。次節で述べることであるが、本研究は、働きかけの対象が不要物のある場所になるようなスキーマ表示を提案したい。

4 本研究の説明

これまでの議論では、同じ使役移動構文に用いられる動詞であっても、wipeクラスとその他の動詞というふうに両者を一応区別してきた。しかし、wipeクラスの動詞であっても、不要物の除去の意味への結びつき

やすさは同じではないようだ。上で何度も言及した wipe, sweep, brush, rakeについては、除去もしくはこれに準じる意味が英英辞典に記述されている。これに準じる意味とは、「ある場所をきれいにする」といった意味を指す。

- (15) a. wipe: to rub sth against surface, in order to remove dirt or liquid from it (OALD⁸)¹²⁾
 b. sweep: to clean a room, surface etc. using a broom (ibid)
 c. brush: to clean, polish, or make smooth with a brush (ibid)
 d. rake: to pull a rake over a surface in order to make it level or remove sth (ibid)

上に示したそれぞれの語の定義は、OALD⁸のみからの引用であるが、LDOCE⁵,¹³⁾でも似通った表現でそれぞれの語義が記述されている。一方、dab, rub, scratchなどは、Levin(1993)ではwipeクラスに分類されてはいるが、少なくともこれらの辞書には除去の意味もこれに準じる意味も記述されていない。このことは、wipe, sweep, brush, rakeなどより、dab, rub, scratchの方が除去の意味に結びつきにくいことを示唆しているだろう。

ここで、上で取り上げたbang, shake, tap, kick以外にも、本研究が問題とする構文に用いることができ、かつwipeクラスには属さない動詞があることにも注目したい。

- (16) a. She was beating the carpet.
 b. Papa flicked his cigar.
 c. Amhed picked his teeth.
 d. Tom stamped his boots.
 e. He pressed the accordion.
 f. He knocked my hand.
 g. He smoked the nest of bees.
 h. He boiled sea water.
- (17) a. She was beating dust out of the carpet. (OALD⁸)
 b. Papa flicked the ash from his cigar. (LDOCE⁵)
 c. Ahmed picked the melon pips from his teeth. (LDOCE⁵)
 d. Tom spoke as he stamped snow from his boots in the doorway of the farmhouse kitchen. (BNC)
 e. He pressed the air out of the accordion in a loud sigh and snapped the leather strap shut.

(COCA)

- f. He knocked the knife from my hand.. (LDOCE⁵)
 g. He smoked the bees out of the nest. (LDOCE⁵)
 h. He boiled salt out of sea water.

(研究社英和大辞典)¹⁴⁾

ここに挙げたbeat, flick, pick, stamp, press, knock, smokeおよびboilも、NP V NPを基本用法とし、かつ[x ACT ON y]が基本義である動詞だと言える。上で言及した二種類の英英辞典でこれらの意味を調べると、pick, smokeについては「(ある場所への)働きかけ+(不要物の)除去」の意味が、それぞれの語義の一つとして一方のLDOCE⁵に明確に記述されている。

- (18) a. pick: to remove something carefully from a place, with especially something small (LDOCE⁵)
 b. smoke: to fill a place with smoke in order to force someone or something to come out (LDOCE⁵)

この記述は、wipeクラスの動詞でなくても、つまりLevin(1993)が言うところの除去動詞には分類されていなくても、除去の意味に結びつきやすい動詞があることを示している。beat, flick, knockについては、pick, smokeほど「(ある場所への)働きかけ+(不要物の)除去」の意味がこれらの辞書には明確に記述されていない。しかし、これらの辞書には、明らかにこうした意味を表す例文である(17a, b, f)が記載されている。このことは、beat, flick, knockは、pickやsmokeよりは除去の意味に結びつきにくいだが、stamp, press, boilよりはこうした意味に結びつきやすいことを示唆しているだろう。

以上の議論をもとに除去の意味への結びやすさを比較表示すると、およそ次のようになるだろう。AからEへのタイプ分けは、単に説明の都合上のものである。

- (19) A > C > B, D > E
 Aタイプ: wipe, sweep, brush, rakeなど
 Bタイプ: dab, rub, scratchなど
 Cタイプ: pick, smokeなど
 Dタイプ: beat, flick, knockなど
 Eタイプ: stamp, press, boilなど

上で用いたデータの量は少ないので、これはあくまで

暫定的な順位付けである。しかし、除去の意味への結びつきやすさは、動詞によって段階的に異なっていると言うことはできるだろう。よって、除去の意味に拡張するかしないかという観点から、動詞を除去動詞(wipeクラス)とそうでないクラスに二分することには問題があると思われる。また、特定の動詞にのみ最初から除去を表すフレームを当てはめることにも問題があるだろう。これにより、本研究は、働きかけの動詞と非目的語NPから成る使役移動構文を、全て同じ形で説明するという形を取りたい。

本研究は、問題となる使役移動構文の全てに共通するスキーマを提案する。そして、このスキーマの事例化という観点から、問題となる構文の成立を説明する。⁴ 前節の最後で、Boas (2003)によるremoval-sense-2のスキーマに問題があることを指摘した。働きかけの対象が場所ではなく除去される物そのものである、という問題である。本研究が問題とする使役移動構文の意味を正しく表すためには、働きかけの対象は場所であるべきである。そこで、本研究はこうした構文のスキーマとして、次のようなものを提案する。

(20) 本研究が提案する「働きかけを表す動詞 + 非目的語NP」から成る使役移動構文のスキーマ



スキーマの基本的な部分は、Boasをそのまま踏襲している。しかしこのスキーマは、働きかけの対象が場所であり、この場所に除去される物が位置していることを正しく表している。また、このスキーマは一見単純ではあるが、次のような参与者及び概念構造を図式的に表している。

- (21) a. 参与者: agent, theme, place/path
 b. 概念構造: [x ACT ON z & y AT z]
 CAUSE [BECOME y NOT AT z]

実線矢印、破線矢印ともに一定の長さがあるが、これは、時間の長さには無関係である。これらはそれぞれ、働きかけと移動を表すのみであるから、働きかけや移動が持続的であっても瞬時的であっても構わない。このスキーマは、実線の矢印が●に直接届いていないので、agentからthemeへの使役の連鎖が表されていない点が問題だと思われるかもしれない。しかし、後で述べることに関わることだが、場所への働きかけとそこにある物が取り除かれることを、一つのまとまった出来

事として言語使用者は認識していると本研究は考えている。これにより、本研究は、敢えてこのような表示を採用したい。このスキーマは、これまで挙げた全ての、働きかけの動詞と非目的語NPから成る使役移動構文の意味を正しく捉えている。この点は、Goldberg (1995)やNemoto (2005)などとは大きく異なるだろう。一方、参与者と統語項との連結については、Goldberg (1995)やNemoto (2005)などと基本的には同じである。agent, theme, place/pathは、それぞれ主語、目的語、斜格に連結すると考えるものとする。

本研究は、ある文全体の意味が、このスキーマを事例化していると言語使用者が判断できる場合、この文が(働きかけを表す動詞と非目的語NPから成る使役移動構文として)成立する、という説明法を提案する。⁵ これをもう少し具体的に言えば、言語使用者が[NP₁ V NP₂ FROM NP₃]という統語形式に対し、およそ次のような解釈ができなくてははいけない、とも言い換えられるだろう。

- ① NP₁が表すものはVが表す動作を行使できる。
 ② NP₂が表すものはNP₃が表すものの中に含まれる。
 ③ Vが表す動作は、NP₃が表すものに向けられ、NP₂が表すものをここから移動させる。

ここで、上で取り上げた例を二つほど再度見てみよう。説明の都合上、どちらも幾分簡略化している。

- (22) a. He stamped snow from his boots.
 b. He pressed the air out of the accordion.

すでに指摘したことであるが、stamp, pressは除去の意味に最も結びつきにくいタイプだろう。しかし、どちらの主語もそれぞれstamp, pressという動作を行使できると解釈できるので、①を満たしている。また、snow, the airはそれぞれhis boots, the accordionに含まれると解釈できるので、②を満たしている。(a)については、heが行使する動作stampがhis bootsに向けられ、snowをここから移動させると解釈できるので、③を満たしている。(b)についても、heが行使する動作pressがthe accordionに向けられ、the airをここから移動させると解釈できるので、③を満たしている。これら以外の動詞を用いた例についても、このような形で説明できるだろう。フレームという観点から言うなら、この説明法は、動詞のフレームだけでなく名詞のフレームも参照している。上で「文全体の意味」という部分を強調したのはこのためである。本研究は、ある文の成立を説明する際、もっぱら動詞フレームのみに頼る、あるい

は動詞フレームの意味情報を増やしすぎるのは問題であると考えている。

本節最後に、このスキーマを想定することへの一つの動機付けを述べたい。確かに、このスキーマは、本研究が問題とする構文の意味を正しく捉えていると言える。しかし、これが人間の認知や行動にどのように関わっているかを述べることも大切だろう。本研究はここで、仲本・深田(2008)¹⁵⁾を援用したい。仲本・深田はおよそ次のように述べている。人間は、日常生活の中で様々なことを経験するが、この中には繰り返し現れかつ一定のパターンや規則性を持つものがある。これはイメージスキーマと呼ばれるが、身体的経験を通じて獲得されるイメージスキーマは、意味のある統一体つまり経験的ゲシュタルト(experiential gestalt)である。

本研究は、(20)のスキーマはまさにこの経験的ゲシュタルトに相当すると考えている。ある場所に働きかけてそこにあるものを取り除くという行為は、我々人間はごく日常的に行っている。洗う、ふく、こするという表面接触行為をはじめ、例えば、手を振って手に付着した水を切る、靴を踏みならして靴の泥を取り除く、容器を逆さにして容器の底をたたき中身を落とす、チューブを押して中身を出すなど、人間はこうした行為を日常的に繰り返し行っている。そして人間は、こうした行為を一つのまとまりとして認識していると思われる。(20)を経験的ゲシュタルトの一つであると見なすのは、まさにこのためである。上で、スキーマ表示に使役連鎖が表示されていないことに言及した。ゲシュタルトとは、一般的に言うところ、全体の意味が必ずしも部分の意味の総和にはならない一つの統一体を指す。本研究の提案するスキーマも一つのゲシュタルトであると見なせば、スキーマの構成部分から使役の連鎖が読みとれなくても問題はないだろう。

本研究は、したがって、(20)のような経験的ゲシュタルトが、(英語においては)働きかけを表す動詞と非目的語NPから成る使役移動構文という形に具現されていると考えている。Goldberg(1995)は、基本タイプの構文は人間の経験に基本的な事態を記号化している、といった主旨のことを述べている。本研究の考えは、こうした分析にも整合していると言える。

5 まとめと今後の課題

以上述べたことをまとめてみよう。本研究は、「働きかけを表す動詞+非目的語NP」から成る使役移動構文がどのように成立するかについて述べた。働きかけ

を表す動詞とは、[x ACT ON y]という概念構想で表される動詞を指す。

第2節では、この問題の解決にGoldberg(1995)の構文文法を当てはめることを試みた。概要は次の通りである。Goldbergの構文文法に従うと、本研究が取り上げる使役移動構文は構文の項に動詞の項が融合されることによって成立する、と一応は説明できる。しかしこれに従うと、かなり不自然な構文項と動詞項の融合を認めなくてはならない。また、同理論は、移動物を表すNPと動詞の意味の関係を捉えられないという点で不十分である。

第3節では、フレーム意味論を利用した分析であるNemoto(2005)とBoas(2003)を検討した。概要は次の通りである。Nemotoの説明は、Goldbergと異なり、いま上で述べた不自然な融合の問題を回避でき、目的語位置に生じるNPと動詞の意味の関係を捉えられる、という利点がある。しかし、この説明は、sweepなどのこするような働きかけを表す動詞にしか当てはまらない。一方Boasの説明は、一部を修正することで、このような動詞以外のwipeタイプの動詞にも適用できる。しかし、Boasの説明を本研究が問題とする使役移動構文全てで当てはめるのは無理があるだろう。また、Boasの提案するremove-sense-2のスキーマは、働きかけの対象が場所ではなく、除去されるものとなっている点が問題である。

第4節では、第2、3節の議論を受け、本研究の提案を述べた。概要は次の通りである。使役移動の意味への結びつきやすさは、動詞により段階的に異なる。よって、働きかけを表す動詞を除去動詞(wipeクラスの動詞)かそれ以外の動詞に二分するのは問題である。これにより、本研究は、全ての働きかけを表す動詞に当てはまる説明法を提案する。本研究は、次のようなスキーマを提案した。

(20) 本研究が提案する「働きかけを表す動詞 + 非目的語NP」から成る使役移動構文のスキーマ



ある文全体の意味が、このスキーマを事例化しているか、という観点から説明するのが本研究の提案である。このスキーマは、構文のスキーマであると同時に経験的ゲシュタルトの一つでもある。

今後の課題は次の通りである。(19)の動詞タイプと使役移動の意味への結びつきやすさの比較表示は、コーパス等を用いたより広範なデータから再度検証する必

要があるだろう。本研究は、ある文の成立を説明する際、名詞のフレームも考慮することも大切であると述べたが、これを具体的に記述することはしていない。今後は、名詞のフレームと動詞のフレームが具体的にどう関わっているかという観点からの分析も必要だろう。

注

1. Levin (1993)によると、除去動詞はremoveクラス、clearクラス、depriveクラスおよびwipeクラスの四つの下位クラスから成る。wipeタイプは、さらに様態タイプと道具タイプに細分類される。
2. Goldbergにそのまま従うと、上の表示の二つ目の項役割は、pathではなくgoalが表示される。しかし、終点への移動であっても、起点からの移動であっても「移動」であることには変わらないので、本研究はどちらにも当てはまるpathを用いることにした。
3. 実のところ、前節で議論したGoldberg (1995)の構文文法も、フレーム意味論的観点を取り入れている。動詞の参与者役割の表示は、まさにこの観点に基づく動詞の意味の記述法である。しかし、前節で述べたように、この表示には動詞が義務的に要求する役割のみが書き込まれており、当該の現象を説明するには不十分である。
4. 構文スキーマを利用して様々な文の成立(認可)を解明すること自体は、本研究独自の方法ではない。上で取り上げたBoasも基本的にはこうした説明法を利用している。よく知られたものとしてはIwata (2008)¹⁶⁾ や山梨(2009)¹⁷⁾ などでも、このような説明法が用いられている。
5. 文の成立の可否を判断する際、動詞の意味のみだけでなく文全体の意味を考慮する必要がある、といったIwata(2008)の考えを踏襲している。

参考文献

著書・論文

- 1) Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1991. Wiping the slate clean: A lexical semantic exploration. In Beth Levin and Steven Pinker (eds.) *Lexical and conceptual semantics*. 123-151. Blackwell.
- 2) Levin, Beth. 1993. *English verb classes and*

alternations: A preliminary investigation. University of Chicago Press.

- 3) 中村捷. 2002. 『意味論』 開拓社
- 4) 都築昌子. 2004. 行為連鎖と構文II : 結果構文 中村芳久(編)『認知文法論II』 89-136
- 5) Nemoto, Noriko. 2005. Verbal polysemy and frame semantics in construction grammar: Some observations on the locative alternation. In M. Fried and H.C. Boas (eds), *Grammatical constructions: Back to the roots*, 119-136. John Benjamins.
- 8) 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 9) Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. University of Chicago Press.
- 10) Boas, Hans C. 2003. *A constructional approach to resultatives*. CSLI Publications.
- 11) Fillmore, Charles J. 1982. Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea (eds.) *Linguistics in the morning calm*, 111-137, Hanshin.
- 15) 深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』 研究社.
- 16) Iwata, Seizi. 2008. *Locative alternation: A lexical-constructional approach*. John Benjamins.
- 17) 山梨正明. 2009. 『認知構文論』 大修館書店.

辞書・コーパス

- 6) Corpus of Contemporary American English. (COCA)
- 7) British National Corpus (BNC)
- 12) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Eighth edition, 2010, Oxford University Press. (OALD⁸⁾)
- 13) *Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth edition, 2009, Longman. (LDOCE⁵⁾)
- 14) 『研究社英和大辞典』 2002, 研究社.

